

エンゼルメイク

会誌編集部

I. はじめに

「エンゼルメイクの本ない？」と聞かれたことがあります。

検索すると、かろうじて1冊『ケアとしての死化粧 エンゼルメイク研究会からの提案』¹⁾を所蔵していたのでそれを提供しました。エンゼルメイク？死化粧って看護師がするの？と少し驚いたので調べてみました。

II. エンゼルメイクとは

エンゼルメイクとは「死に顔に施す化粧であり、医療行為による侵襲や病状などによって失われた生前の面影を、可能な範囲で取り戻すための顔の造作を整える作業」²⁾のことである。

エンゼルメイクは死後の処置のひとつである。死後の処置、エンゼルメイク、エンゼルケアなどさまざまな用語があるが、用語の概念や定義は不明瞭なままになっている³⁾。

死後の処置とは、家族が最後の時間を過ごした後、遺体を清潔にし、生前の外観をできるだけ保ち、死によって起こる変化を目立たないようにするための処置をいう⁴⁾。例えば、体内に残っている排泄物を手で圧迫するなどして対外に排出させる、全身の清拭をし、創があるときは包帯交換をする、などがある。

死後の処置には保険点数の適用がなく、実費請求されるものである。

死後の処置は看護業務なのかどうかも定義づけられていない³⁾という意見と、看護師による看護ケアの範疇に含まれるものとして認識される²⁾という意見がある。また、看護基礎教育における卒業時に到達すべき技術項目から死後の処置は除外されている（「助産師、看護師教育の技術項目の卒業時の到達度」について 平成20年2月8日 医政看発第0208001号）。しかし実態として病院における死後の処置は看護師が行っている業務である（他職種が関与することもある）。

III. 日本での歴史・経緯

「1950～1960年代までは70～80%の人が自宅で死亡し、家族が看取り、死後の処置を行っていた。しかし、1970年代の後半に逆転し、1990年代には、約80%の人が医療機関で死ぬようになり、看護師が代行するようになった」³⁾。

従来、家族が行っていた死後の処置を看護師が行うようになったが、看護教育がその状況の変化についていけていなかったようだ。しかし病院においては看護師のほかに死後の処置を担うものがなかった。死後の処置を経験することが増えるにしたがい、看護師はこのテーマへの関心を高めていったと思われる。

研究論文数からみると、1988～2010年の死後の処置関係の文献数は436件。その80%以上は2005年以降に出された文献だった³⁾。

研究内容では①死後の処置の技術の向上、②遺体の処置から患者と家族の精神的援助への認識の拡大、

が見られたが、問題点として①エビデンスと適切な手順が示されていない、②ケア物品の不備・不足、③ケアにかかる時間の不足、などがあげられる³⁾。

「一般社会の動向としても、小林の『死化粧—最期の看取り』や青木による『納棺夫日記』などの小説が話題になった。さらに青木の小説は映画『おくりびと』(2008年)として世界的に注目され、『死後の処置』を行う看護師以外の職種が存在が示され」た³⁾。これらの本や映画によって、看護師以外が行う死後の処置の方法や死後数時間経過した後の状況などがわかり、看護師が死後の処置を行うことの意味を再確認させる機会になったようだ³⁾。

「死後の処置の重要性とその意味を再認識した看護師は、院内の実態調査を行い、エビデンスに基づいた《死後の処置》を目指し、〈遺体の生物学的な変化に基づく見直し〉と〈患者と家族の精神的ケアとしての見直し〉³⁾をする研究へと変わっていった。

具体例では、従来は死者の手を組ませるために手を縛ったりしていたが、縛ることが後で遺体に悪影響を及ぼしたり、家族からすぐに遺体扱いせず普通にしてほしいという要望を受けたりした。そのため、手を組ませることの意味を考え、縛ることによる遺体の変化を学び、習俗的慣わしの変化や遺族への精神的ケアも考えるようになった、といったことがあげられる。

IV. グリーフケア

グリーフケアとは、「死別体験者(おもに遺族)への援助を表す言葉として広く用いられており、悲嘆のプロセスにおいて、喪失により生じる問題を軽減するための医療者からの働きかけ」²⁾のことである。

エンゼルメイクは、グリーフケアのひとつとして遺族とのお別れを円滑に行うためになされる最初の喪の作業・儀礼と捉えられている²⁾。闘病生活により変化した患者の外見を遺族が見慣れた姿や穏やかな姿に整える作業に家族が参加することで、死を受容するきっかけとなり、お別れができた実感を得ることがある²⁾。2000年前後より、看護師業務の一環としてのケアから遺族中心のケアへと視点が変わり、死後の処置に家族がともに参加するようになっている^{5, 6)}。

V. おわりに

従来は家族が行っていた死後の処置は、処置というよりはお別れの一過程でした。それが病院で死ぬことが多くなると、家族だけではお別れの方法がわからず看護師が手伝うようになった、ということでしょうか。例えば、治療により生前とは違う様相のご遺体(何かの管がついていたり)となっていることがあります。また、顔に粘着テープによる肌あれができていたりもします。そういった傷あととは死亡すると治癒しません。それらをなるべく生前の故人の容貌や装いに整える方法を知っている家族は少ないと思います。

エンゼルメイクの本といっても、技術的なものばかりでなく、遺族へのケアなど心情的なものや日本人の死生観の理解を深めることも必要です。それは看護学だけにはとどまらず、前述の一般書や映画でも参考になると思います。最近読んだ本では、『おもかげ復元師』⁷⁾や『エンジェルフライト』⁸⁾が参考になりました。どちらも看護師ではありませんがエンゼルメイクがかかわる話で、グリーフケアにもなっています(医療者ではありませんが)。

そういう本も病院図書館にはあってもよいかもしれません。

なお、看護系でなじみのある出版社からは、『ご遺体の変化と管理—“死後の処置”に活かす』⁴⁾が出版されています。

参考文献

- 1) 小林光恵. ケアとしての死化粧：エンゼルメイク研究会からの提案. 東京：日本看護協会出版会；2004.
- 2) 小林珠実：日本人の死生観・遺体観に基づくグリーフケアとしてのエンゼルメイクに関する考察. 医療・生命と倫理・社会. 2012；11：94-101.
- 3) 井上ひとみ：《死後の処置》に関する研究動向と看護の課題. 帝京大学医療技術学部看護学科紀要. 2012；3：27-8.
- 4) 伊藤茂. ご遺体の変化と管理―“死後の処置”に活かす. 東京：照林社；2009.
- 5) 飯田正代, 上口奈与美：家族さんかによる「死後の処置」に対する家族心理調査―シャワー浴を取り入れて. 日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ. 2007；37：377-9.
- 6) 荻原桂, 三木明子, 谷美行 他：エンゼルケアに参加した遺族の思い. 日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ. 2007；37：380-2.
- 7) 笹原留似子. おもかけ復元師. 東京：ポプラ社；2012.
- 8) 佐々涼子. エンジェルフライト 国際霊柩送還士. 東京：集英社；2012.
- 9) 笹原留似子：復元納棺師が教える！看護・介護職ができるエンゼルケアの基本手技. 介護人財マネジメント. 2013；10(2)：56-70.
- 10) 水島美由紀, 菅原美奈子, 徳間幸子 他：エンゼルメイクの技術の見直しと実施から得られた看護師の意識変化. 新潟県厚生連医誌. 2010；19(1)：39-43.

(文責：井上智奈美／三菱京都病院)